

浄

土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別後援）雑誌第三五二号
昭和二十五年七月二十五日印刷 昭和三十一年一月一日発行

第二十六卷

第一号

新年号

浄土


既刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円十八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 本願の不思議にて
3. 人生は信ずる心から
すべてを包む愛

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
 2. なやみとまよいのもの
 3. 信ずるところ
 4. 美わしき世界の建設
- 惻々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子
文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳
宗教の信仰を遺文にみる 佐藤 賢順

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円・十八円

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

浄土 正月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

子君放談……………武田秀郷……………(8)

年頭所感……………椎尾弁匡……………(2)

選択の社会……………山本空外……………(4)

輪島聞声尼伝……………大橋俊雄……………(18)

死に対するもの……………森 赫子……………(22)

横川への道……………高橋良和……………(24)

インド紀行8……………斎藤昭俊……………(20)

童話 きいたお祈り……………伊東拳位……………(28)

法然上人の感化……………村上博了……………(26)

新編百喻経(1)……………K……………I……………(7)

信仰相談…………………………(32)

浄土の三部経……………佐藤賢順……………(11)

一扉の御法語……………(22) 一童心仏心……………(38)

釈尊の生涯(六)……………佐藤密雄……………(34)

浄土

正月號

先づ名号を唱れば、名号の徳として妄念も自ら止み、願心も自ら生ずる也。何に況や本願の元意は乱心止み難き者を化せんが為也。妄念の止め難きに付ても、一向に本願を仰くべし。散乱の静まり難きに付ても、一向に名号を唱うべき也。

法然上人御法語



年頭所感

法華光海

新
刊

椎 尾 弁 匡

(文学博士)

本誌「浄土」創刊に骨折った中村君は逝き、真野君は病むので新年号の巻頭を書けと編集同人に促されて。弥陀成仏以来今に十劫なりとは、大小の無量寿經にも、天親以来の祖釈にも出ており、殊に浄国無衰變一立古今然の句もあって法藏さまが建て終ってから其のまま残れる古屋敷のように思う人があるかもしれぬ、それでは浄土は堅固でも古屋である。真の浄土は一ときも止どまっておらぬ。刻々進歩し改造される。阿彌陀經には極樂に生ずる衆生が不退転であるというが、

何人も其処では進歩向上するといふので、終夜運轉する特急車に寝静まつておる乗客のようではなく、各々醒め進むのは弥陀如来の選択本願力に依り南無阿彌陀仏するのである。

それでは客は眠るときなく、ノイローゼになりはせぬ？。御尤も、ねる子は丈夫と、赤子はネンネでもよいが、ねろねろとねむらせておるうちに精薄、無能か、輕卒、放蕩のカミナリ族に仕上げることになるから、如来は健全に育つ道を歩く。それが二百一十億の淨土から選び出される淨土、一切の菩薩諸仏の悲願を満足させた極樂道となる。

顧みるに、郷里の農村で愛せられ乍ら、いたづら小僧から幾歩か離れて、荒垣を飛び廻るのや、溝田に泥まみれになるのを眺めたり、暑い夏の日に川にとび込む河童のわきで、おづおづ足を浸した憶病者は、母にも十歳まで育たぬ弱子と思われたそうだ。が、次の十年には發育の満点に達した。そこに放任も干涉も程があることを知る。今の世相には片手落ちで改善すべき

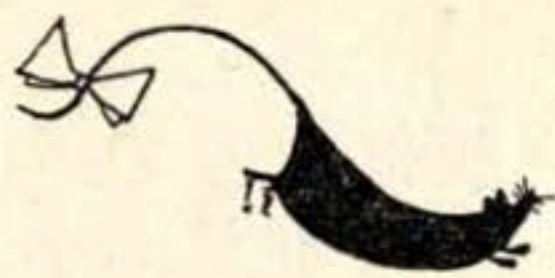
ものが多いから、善いと思う淨土でも二百億も比較すれば、善中の善、美中の美が扱ひ出される。兆歳永劫の修練でねりあげられたとすれば、その結晶は單なる火山や氷海の雜鉍屑土とは違ふ。老納今年、数えて八十五、朝の四時から南無阿彌陀仏に次々と応接する一日の行事は仲々捗る。三百六十五日一年経る毎に仲々進む。いま、法然上人の八十年、善導大師の六十九年、天親竜樹の念仏、釈尊の生涯へと溯りゆけば未だ省みられぬ玉光金銀の光が明日の仏法を教ゆるもの多きを感じる。

仏身觀には、「無量寿仏を見奉る者は、即ち十方無量の諸仏を見奉る。無量諸仏をみ奉ることを得るが故に諸仏現前に授記し給う」と、何事にも先ず南無阿彌陀仏して。

(大本山増上寺法主)

選^{せん}択^{ちやく}の社会

——新年に望むもの——



山 本 空 外

(文学博士・広島大学教授)

一

現代は社会運動の発達いちじるしく、ために制度的社会に眼を奪われ勝ちで、制度では到底手の及び難い「選択の社会」のほうは忘れられているかのようである。社会運動の目指すところは直接には制度上の改革であるが、なるほど制度的社会の改革も必要にはちがいないが、さらにそれ以上に必要なのは「選択の社会」のほうの改革ではなからうか。もとより制度的社会の改革も急を要するはずであるが、さらにそれにもまして急を要するはずなのは、「選択の社会」のほうの改革とわたくしは断言したい。なぜであるか。

いったい社会運動が制度の改革を目指すゆえんは、たとえ

ばわれわれが貧乏で困るのは社会の制度が悪いからであるとか、また青少年が不良になるのは社会の制度の罪だといったぐあいには、経済問題にしても道德問題にしても、社会制度にそうした責を転してゆこうとする線に立っているからである。かくして何もかも社会の制度をあてにする制度偏向にも一理はあるが、しかしかに制度を改革してみたところで、その制度的社会ではどうにもならない社会があるのである。そうしてこのほうの社会こそわれわれの社会生活の大部分を成している主内容なのではないかと、わたくしは考えるのであって、これを「選択の社会」と名づけるのである。

「選択の社会」という名称はわたくしがはじめて用いる言

葉であるから、何のことかと思われるかもしれないが、「選択」とは二字のいずれも「えらぶ」という意味であって、自己の意志一つでえらびとってゆく社会のことを「選択の社会」と称するわけである。こうした一人一人の自由意志で決定し得る「選択の社会」こそ、万人各自の社会生活の主内容を形成するとともに、また各自の幸福の決定権を握る鍵でもある。そうした「選択の社会」の浄化のみが今日の社会運動の危機を救い得もする理念であるとわたくしは思うのであって、この理念に着想した最高の宗教家は実に法然上人にほかならない。法然上人の主著が『選択、本願念仏集』と名づけられるゆえんでもあろう。本願の念仏を選択するところに浄土への道が開け、浄土の生活が約束されもするのであり、そこに「選択の社会」としての浄土が力説され、提唱されたのである。したがってまたそれを選択して浄土への生活を愛樂もし、精進した門弟が数知れず輩出して、今日にいたるまで南無阿弥陀仏を知らぬ人はおそらく一人もいないであろうと思われるほど国中にひろまり続けていることは、世界の国々にその例を見ない。

二

社会の制度のほうは誰にでも一律にあてはまるもので、選挙の制度、納税の制度、学校の制度等々にすべてそうなので

あるが、そうした一律にあてはまる社会制度のうちにあつて、われわれ一人一人の具体的に生きている社会そのものは、その一人一人のえらびとった「選択の社会」を、主内容とするからこそ、各人各様になってくるわけである。同じ社会制度のうちにありながら、父のえらびとった職業により、また父のえらびきめた配偶者によって、その家庭は父の友人とは全く別の「選択の社会」を生活することにもなり、同様にして同じ家庭に育ちながら兄のえらびとった職業により、また兄のえらびきめた配偶者によって、弟とは全く別の「選択の社会」を生活することにもなる。すべてかくのごとくであつて、ために人によって貧困に泣き、病弱に苦しみ、不和を来し、悲惨を招く方面も少くないと考えるとき、経済問題や道德問題その他が社会制度によってのみ解決されるものと断ずるのは早計であらう。制度的社会はただ個人の「選択の社会」の周辺として一律に関係するにすぎないもので、一々、個人内部の「選択の社会」にまで決定権を発動し得るものではない。したがって、人をねたみ、世をのろう前に、むしろ自己の「選択の社会」を内省すべきではなからうか。

大学という制度にしても一律に学生にあてはまるので、恋愛の制度があるわけではないが、男女共学のなかに恋愛する学生もいる。その事件がこの学生の一生を決定するほどの結

果を来すこともある場合を思うても、制度的社会の手の及ばない「選択の社会」がいかに重大な意義を有するかは論をまたない。人間の生きる社会は決して制度的社会のみでなく、むしろ大半は「選択の社会」にあることを知らなければならぬ。不幸を幸福へと転ぜしめ得るのも亦「選択の社会」に負うところ大であるといわねばならない。

たとえば先の恋愛を例にとっても、自分の愛している女学生が自分を好いてくれる間はよいが、やがて他の男性と仲良くしたりすると、気持も沈み、勉学もでき難くなり、遂には相手を殺して、自殺してしまおうかとも考えるかもしれない。こういったことは程度を異にし、また問題を別にして諸方面にさまざまな形態をとって生じ来るもので、たとえば社会の制度が資本主義から社会主義にきりかえられても、それによつてはどうにもならない社会問題ではなからうか。社会主義の制度になったら、失恋してもそういう気持にはならないとはいえない。それどころか、その学生自身にとつては、その問題の解決は、制度の改革以上に重大事と考えることでもあろう。

三

ともかく一人一人の「選択の社会」が各自の社会生活の具

体的内実を形成し、制度的社会のほうはその外側を律する形式にはかならない。後者は万人を一律に規定するもので、簡単には改革できず、また改めてみてもその運営の仕方いかんでは利害相半のこともあるうし、いわんやその掌にあたる政治家や官吏などの「選択の社会」が不浄なる場合には、乱用されることも少くないであらう。各自の自分勝手、したがって利己的な「選択の社会」に生きている人ほど、そうした乱用をも敢てすることになって、ために社会の幸福を阻害するものである。

その「選択の社会」ならば、制度的社会とちがって、本人の自覚を深め、内省を正すことによつて直ちに改められ得るものなのである。たとえば前例に挙げた青年学徒にしても、その恋愛の相手を殺し、自己の生命をも断たんとした発作に悩む社会関係からして、師と仰ぐ教授にでも相談して、以て人生観・世界観を掘り下げ、生命の尊さの自覚を深め得れば、この師弟関係も同じく社会関係であるが、その「選択の社会」からはかえつて相手の女性を殺すどころか、むしろ押んでもよいような淨らかな心持ちさえ覚えてくるであらう。なぜかという、こうした生命の深き自覚は、その女性が行が意のままにならなかったおかげで弁えられるにいたつたのであるからである。

浄土への道はこうした「選択の社会」の浄化によってこそ開けるもので、しかもそれは「速」かにである。

そこが制度としての資本主義や社会主義の検討批判と相違するので、また「速」かでなければ間に合いもしない。何となればわれわれの心臓は今日止まってしまいかもしれないからである。かくも生命に真剣に取り組むのであれば、人生も社会も結局観念の末に走って路頭に迷うのほかあるまい。それでこそ『無量寿経』も『いのち』と取り組んでいるではないか。その本願の念仏を選択して浄土宗を開創した法然上人は『選択本願念仏集』において「速」の一字に全宗教観を集約なされたことは、まさに世界宗教史上にその類を見ない高邁な悟境といわねばならない。われわれの新春の覚悟もこの一事の右に出るものは、けだしなからうと思われる。

(了)

新編 百 喩 経 (一)

百喩経は、僧伽斯那が撰をした、譬喩小喩九十八話を、集めたもので、イソップ物語式の、面白いものだが、今それによく似た、実話・寓話など、小話を収めて、「新編百喩経」、と名付けたり。

一 もののあじ

むかし、春日の局は、家光から、「一番うまいものは……」といわれた時、塩を出した。「では一番まずいものは……」といわれたとき、又、塩をだした。

家光が不思議に思って、たずねると、局「うまいも、まずいも、塩かげん一つでございます」

と答えたそうだが、鈴木博士は、あまい、からい、にがい、すい、などというほかに、うまい、という味のある事に、気がついて、味の素を発見したのだそうだが、人の世も、物質だけで無い、人情という、味の素のあることを、知るべきだろう。

二 たんすのこやし

私が吉野山にいた時、近所の老婆で、「孫が生れたら入用だ」、といって自分の子供の赤子の時の、着物・帽子・玩具などを丹念にとっておいたが、さてその子供が、嫁を貰い、孫ができたが、それらの物は、一つも役にたたず、結局くず屋ゆきとなったが、それならもつと早くに、戦災者なり、水害地の人々にでも、贈るなりしたら、もつと有効に、利用できたものを、世の中には、たんすのこやしの、いかに多いことよ。

三 馬鹿と知りつつ

私の近所のTさんは「競輪でも、パチンコでも、結局長い間では損ですよ、あれだけの店を経営して、やっていくし、あれだけの経費をかけ、儲けていく、それだけやる者が払っているんですからね、馬鹿なもんですヨ」そう知っていて、今日も妻君に叱られつつ、パチンコにでかけて行った。

(伊東挙位)

子君放談



武田秀郷

一
吾輩はねずみである。名前はない。しかし世間では吾輩の同族を総称して、ネズ公とかチュウ助などと失礼な呼び方をしている。本年は吾輩の年なのであるから、そういう失礼な呼び方はしないで貰いたい。

われわれのことを「ヨメサマ」とか「アネサマ」とか「ムスメ」とか、非常に親しみ深く、尊敬を以って呼んで下れる地方が、特に関西に多い。もっともこれは正月だけに限ったことだが、しかし、呼びすてにしないの

だから、そう呼んでくれる心持ちをくんで、正月には余り騒がないことにしている。中国では一月の七日に、ネズミのヨメイリといってお祝いをしてくれるところもある。日本人もこういうよい風習は真似をして貰いたいものである。

お正月に人間の家に飾られるお供餅はわれわれの大好物である。だから、時々そのはじをかじるのである。しかしおこってはいけない。これも地方によってのことだが、われわれの噛った餅の噛り方によって、その年の吉

凶を判断するのである。だから、お供餅はむしろわれわれが噛った方がよいくらいのものである。われわれのおかげでその年の吉凶禍福が前以って分るのだからね。

二

体の小さいことを「ネズミ」のようだというし、よく立働くもののことを「コマネズミ」のようだというが、全くわれわれはよく働く。なるほど体は大きくはない。だが、たとえにもいうだろう。山椒は小粒でもピリリと辛いと。全くそのとおり、体の大小で簡単に判断して貰いたくないものだ。イソップ物語の中にも出て来るだろう。ライオンが日向ぼっこをしていたら、その前肢のところにチヨロチヨロと出て来たねずみを、ヒョイと押へつけてしまった。小ねずみは一生懸命声を張り上げて、

「ライオンさん、どうか助けて下さい。その代り、いつかきつと恩がえしをしますから」
とたのんだ。ライオンはこんなちっぽけな奴が何をえらそうな恩がえしなどと……は思っ

たが、丁度その時はお腹も一杯でたべたくなかったので、そのまま逃がしてやった。ところが、そのライオンが獵物を探がしまわっているうちに、獵師のわなにかかってしまった。

藤蔓で編んだ綱が足にからんでどうしてもとれない。さすが百獣の王といわれるライオンも身動き出来ずにへたばってしまった。その足もとに、チョロチョロと出て来たのが、前に助けてやったチビ公。

「ライオンさん、いま助けて上げるよ」

そういつて、藤蔓を一本一本かみ切つて下れたという話である。とおです。休は小さくても、ライオンを助けたのである。ライオンばかりではない、あなた方人間さえ助けたこともある。これも、誰でも知っている有名な話。といつても古い話で若い人にはなじみでないから、一応あらましを述べようなら、大國主のミコトがスセリ姫を奥さんに貰おうと思つて、そのお父さんのスサノオのミコトのところへ行つた。スサノオのミコトは弓に矢をつがえて、これを大野の真中に射込んで、「矢をとつて来い、そうしたらむすめをやる」といつた。大國主のミコトが野原に入つ

て行くと、四方から草に火をつけた。ミコトが困っていると、チョロチョロと出て来たのが、いわずと知れたわれわれの先祖である。そして

「内はホラホラ、外はズブズブ」と教えたので、ミコトは足もとの地面をとんと踏んだら小さな穴があいたので、これ幸いとばかりその中にもぐり込んで、火の消えるのを待った。やがて穴から出ようとしたら、またチョロチョロと現われて来た。しかも口には、さがしていた矢をくわえて来てくれたのである。これでミコトはスセリ姫とメデタシメデタシと相成つたわけである。

更に、吾輩の学のあるところを示めそうならば、善見律毘婆沙論という、とほうもななくむづかしい仏典を引用してみるとしよう。その第六に、ベーシャ王という王がお供の女達をつれて山遊びに出かけた。遊び疲れて樹陰で休んでいるうちに、うとうとと眠つてしまった。お供の女達は、王が眠っているのにチリチリになつて、摘草か何かを始めて、一人もいなくなつてしまった。その時、樹の幹の穴から毒蛇が首を出して、王を咬も

うとした。正にもう一寸というところで、樹上からわが輩の先祖の一匹が降りてきて、チユウチユウと啼いたので、蛇はおどろいて首をひき込めた。様子をみてまた首をのばすと、また鳴く。そんなことを二三度くりかえしているうちに、さすが寝坊の王様も眼がさめて、おどろいて身を起こして危きをまぬがれた。そこで王様は山の下の方の村の年貢を免じ、その代り山のねずみを村人に養わした。そしてその村を迦蘭陀即ちねずみ村と命名した、というのである。

さて、ことのついでにもう一つ、今度は仏様をも助けた話を御披露してみよう。仏様がおさとりを開いて間もない頃、まだ六師と呼ばれる外道異見がさかに行われていたところのことである。外道共が仏様を何とかして却けようとして、センシャマナキという女にいふくめて仏様の説法をききに通わした。女は毎日まじめな顔で仏様の説法をききに通っているうちに、腹部に草の包みをかくして、それを毎日少しづつふくらまして、最後には臨月のように大きくなった。その時外道の一人が同道して、仏様をつかまえて、お前がこの

娘を孕ましたのだらうと、悪口雑言をわめき散らした。その時、帝釈天が直ちに一匹の黄ねずみに姿をかえて、女の裾から腹にもぐりこんで、草を引きずりおとしたので、一ぺんに悪だくみがバレてしまったというのである。これは菩薩処胎経というお経にちゃんと書いてある。

三

人間共は、吾輩達がこんなに良いことをしてやっているのに、目の敵にして追いまわすのは実に忘恩も甚しいものである。われわれをただの小動物とあなどっていると今に罰が当るぞ。われわれはただのネズミじゃないんだ。勿体なくも、大黒さまのお使いなのである。もっとも仏教の本来のインドでは、ガネシャのお使いである。ガネシャは日本に来て聖天様と呼ばれるようになった神様だが、象の頭をして、われわれ同族の背中にのっているのである。インドのガネシャがどおして大黒様とゴタゴタこんがらかったか、そのいきさつは残念ながら割愛するが、とに角、わが国ではわれわれは大黒様のお使いなのであ

る。大黒様の日本版は、先にも申し述べたように大国主のミコトで、ものの本によると弘法大師が大国というのを大黒と書き改められたとのことである。大国主のミコトとわれわれとの関係は、先に述べたように、かつてミコトの命をたすけて、スセリ姫とハッピーエンドに結ばせて上げたのだから、その恩がえしに、大黒様になった後も、われわれをお使いとして昇格させてくれたのだらう。

段々自慢話になって来て、恐縮な気もするが、お正月のことだから、我慢してきいて貰おう。われわれは、神様のお使いから、一躍神霊としてあがめられる場合もある。中央アジアのトルキスタン近辺にあるとのことであるが、日本にも立派にある。羽後の七座山に「勤鼠大明神」という祠がチャントあるんだ。これは、昔、七座の神に命じられて、堤に穴をあけて、湖の水を田野に流そうとしたが、猫が出て来て仲々出来ない。そこで七座の神が、このネズミをとらねばお前の体の蚤を全部とつてやろうと。猫にいったので、猫はネズミの仕事を邪魔しなくなり、一夜のうちに田圃に満水したとのこと。その功によ

って、大明神に祀られたわけで、不思議なことに、この近辺の猫には蚤がつかなくなったそうである。

もちろん、われわれの中にも色々の階級がある。ドブネズミ、ハツカネズミ、ノネズミ、イエネズミ等々であるが、毛色ではいわゆるネズミ色が一番多いが、その外、黄ネズミ、白ネズミ、中央アジアには金色のもいるそうである。中でも白ネズミは兵隊の位でいうと大将クラスに当るわけで、どこの国でも、白いのが出て来ると縁起がよいと喜ぶ。年をとって甲羅を経ると白くなるので、抱朴子という中国の本には「鼠寿三百歳なり。百歳に満る時は色白く、善く人に憑つて下る。名を伸という。一年中の吉凶及び千里外のことを知る云々」と出ている。吾輩の外套も早く白くならぬかと思っている。

わが国では商家の番頭のことを白ネズミというが、これは、その家の主人を大黒にみたてて、その使者であり、主人のために利にはげむところから出た名前だ、われわれの名にあやかっただけの出度い名称である。先づはこの辺で失礼。

浄土の三部経



佐藤賢順

一

浄土の三部経とは、無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経の三部でありまして、日本浄土教の祖、法然上人が中国の唐時代の善導大師の思想や信仰を指南として選んだ三つの経典であります。法然上人は釈尊が説いた多くの経典の中で、最も重要な経典はこの三部であるとして、これによって浄土宗を開いたのであります。これを所依の経典といえます。法然の門流を継ぐ証空・親鸞・一遍などの浄土教系の宗派はみなこの三部経を所依の経典とするのであります。今、浄土教系の宗派で用いられている三部経は三世紀の中頃、康僧鎧が訳した「無量寿経」と、五世紀の中頃、曇

良耶舎が訳した「観無量寿経」と、四世紀の終り頃、鳩摩羅什が訳した「阿弥陀経」の三つでありまして、「観無量寿経」のほかは、別の翻訳もありますし、梵文の経典も残っております。

では、この三部のうちでは、どれが一番重要かといえますと、宗派によっては、そのうちのどれか一つを特に重要であるとしませんが、厳密に言えば、むしろ三部とも同じ価値を持ち、三部相資けて浄土教のほんとうの意味を現すと見るのが適切であります。法然上人は「三経ともに念仏を選んで以って宗致とす」といっております。三つとも念仏往生のことを説いて中心の教えとしているのであります。

しかし内容はそれぞれ趣を異にしている、違った角度から念仏往生を説いて、それぞれの特色を発揮しており、まず「無量寿経」——これは分量からいって、他の二つを合わせたよりもはるかに多いのですが——は、「本願の書」とか「本願の經典」とでもいいまいでしょうか、無量寿仏すなわち阿弥陀仏の衆生救済の約束を中心として、仏の救いにあずかる道が説かれているのです。阿弥陀仏の本願とは、絶対者である如来が衆生を救済しようとする働きかけでありますから、このお経を「本願の書」というのでありまして、宗教生活というものを便宜上、客観的な方面すなわち仏と、主観的な方面すなわち人間と、この客観と主観とが一体となった方面すなわち信仰生活との三つに分けて考えるとしますと、このお経は主に客観的方面を説いているといわれるでしょう。それから第二の「観無量寿経」はほかの二つに比べますと、たいへん面白くドラマティカルに構成されているお経であります。マカダ国の王舎城に阿闍世という王子がいましたが、これが提婆という悪逆な出家にそそのかされて、父のビンバシャ王と母の韋提希夫人とを亡き者にして、自分が王の位を奪おうとたくらみます。この物語が展開していく間に、韋提希夫人は、妻としてまた母として悲しみと苦しみの底に悩み続けて、人間

のはかなさ、罪の深さに目覚めて戦えます。そして釈尊の教えを請い、如来の救済に深く帰依して、南無阿弥陀仏によって救われる——という筋であります。ここに説かれているのは、宗教的な立場からの人間論でありますから、このお経は「人間の書」とか「人間の經典」とかいうべきであります。まして、主に宗教の主観的方面を説いているのであります。第三番目の「阿弥陀経」は、分量からいって最も少く朝夕、読むのに手頃なお経ですが、これは「無量寿経」と「観無量寿経」との結論でありまして、結経といわれております。ここでは信仰による宗教生活が説かれているのであります。

三部のお経は以上のような異った特色を持っております。宗教生活をそれぞれの角度から説いているのであります。これから三部経の内容をお話するのですが、僅かの時間にとりて詳しいお話はできませんから、三つのお経から、最も大切な言葉を一つずつ引いて、それぞれのお経の特色をお話してみようと思います。

二

まず「無量寿経」から——このお経で最も大切な言葉は、いうまでもなく、如来の誓願、ということであり、誓願は誓い、約束です。それは、

「もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂しんぎょうして、わが国に生ぜんと欲して乃至十念せんに、もし生ぜずば正覺を取らじ。」というのであります。その意味は、心から私の名を呼ぶ者、すなわち南無阿彌陀仏を唱える者を、必ず助け導いてやろう、ということです。そしてまたこのお経にはこの約束が果されて如来は現まじに在ます極樂淨土の仏として衆生を救済している、ということが次のように説かれてあります。

「あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歡喜して乃至一念し至心に廻向して、彼の国に生ぜんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。」その意味は如来の救いを信じて心から念仏する者は、たとえ一声の南無阿彌陀仏であろうとも、極樂へ生れることができる、というのであります。

ここで、このお経の中心となっている阿彌陀仏の本願とということについて簡単にお話しましょう。仏教では仏というのは釈尊や阿彌陀仏に限ったことではなく、釈尊以前にも無数の仏がありますし、これからまた沢山の仏が現れると説くのであります。仏教は人間が仏になる教えでありますから、無数の仏があらわれるはずでありましょう。このお経によりますと、遠い昔、五十三の仏が世に出たその

次に、世自在王仏という仏があらわれました。その時、一人の国王があつて、世自在王仏の説法を聞いて、大に感動して、自分もまた無上の悟りを得て仏になりたいと発願して、国を棄て家を捨て王の位を捨てて沙門となつて、法蔵比丘と名のつたのです。たいへんにすぐれた素質の沙門でありました。ある時世自在王仏の所に行つて、こう問いました。

「私はこれからいかなる修行でも為し遂げて、理想の仏國土を作つて、苦しみ悩むすべての衆生を救いたいと思ひます。いかなる修行をいたし、いかなる理想の國土を作つたらよろしいでしょうか。」この願いに答えて世自在王仏は、特別の仏力を以つて、二百一十億という沢山の仏の國々の善い所、悪い所を眼前に現わして見せてくれました。法蔵比丘はこれらの國々の長短兩所を比較し考究して、よい所を悉く取り入れて、しかもなお一層優れた理想國土を作ろうと心に誓ひ、そのための条件、設計図、理想國土の原理を長い間、考えぬいたのであります。理想國土はただの地上の天國のように、物質的な条件だけが満たされていゝる國ではなくて、精神的な条件が満たされていなければならず、それでこそ初めて理想國土となることができるのですから、法蔵比丘はそれを満たすための条件を長い間、考え

たのであります。これを五劫思惟というのです。そしてその精神的な条件を満たして理想の国土を作るために、実に長い長い修行を為しとげて、仏、如来となり、理想の国を作り上げたのであります。法蔵比丘は菩薩の願行を成就して阿弥陀如来となり、西方極樂淨土を作り上げました。この法蔵比丘が、理想の国を作り上げるためには、必ずこれの条件を備えるであろう、と約束されたその誓約が、誓願とか宿願とか本願とかいわれるもので、これに四十八ヶ条あるところから、これを法蔵比丘の四十八願とも阿弥陀仏の四十八願ともいっているのであります。そして法蔵比丘が仏となるための菩薩の行として行なった修行はいろいろありましたが、つづめていうと智慧と慈悲の修行でありま

す。智慧は物事の真実の姿を把えること、慈悲はこの真実の智慧に基いて多くの人々を助けることでありまして、この二つが一体となって成就された姿が、悲智円満であります。仏はほとけこの大智慧と大慈悲との一体となつての実現であります。これによって作り上げられた理想の国が極樂淨土なのであります。

さてその四十八願の一つ一つを調べてみますと、中には物質的な条件を満たすことを目的としたものも幾つかあります。むろん理想の国ですから物質的満足が勘定に入っ

いても差支えないわけですが、今の場合には、そういうことは象徴的な表現にほかならない、ということ忘れてはなりません。極樂は精神的な理想の国ですから、その中心は精神の救済ということではなければなりません。四十八願のうちでは、第十八願が王本願といつて本願の中心であるとされます。それがさきほど読んだ經典の一句であります。本願は何ヶ条あつても差支えないわけですが、それがすべてこの第十八願に結集されているのであります。真実性と慈悲としての大生命が、衆生に対して働きかけるその救済の営みを表わすには、これよりほかに表わし方がなかったのでありましょう。

もともとこのお経に説かれている法蔵比丘の四十八願の説話は、誰れでもすぐ気づくように、釈尊の生涯が好ましい姿で拡大されて絶対化されたものです。しかしそれはただの空想的なストーリーではなくて、釈尊もまたそこから現れてきた根源的な、絶対的な大生命を、相対的な形をかりて象徴的に表現したのであります。形のないものを形をかりて表わしたので、經典にはこういう象徴的な表現が珍らしくないのであります。

三

次に「觀無量壽經」に移ります。その一節を引きますと

「下品下生の者とは……五逆十惡を作りて諸の不善を具す。かくの如き愚人……まさに惡道に墮して……苦を受くること窮まりなかるべし。かくの如き愚人、命終の時に臨んで……苦に逼められて念仏するに遑^{いとま}あらず。善友^{ぜんぬ}告げて言わく、汝もし念ずること能わずば、まさに無量壽仏（阿彌陀仏）を稱すべしと。是の如く至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀仏と稱す。仏名を稱するが故に念念の中において八十億劫の生死の罪を除く。命終のとき一念の頃^{あいだ}の如くに、即ち極樂世界に往生することを得。」

前にも申しましたように、このお経は韋提希というか弱い一女性が釈尊の教えを受けて救われる過程を描いたもので、平凡な一女性のことですから、自分で難しい修行をする力もなく、自らの人間としての醜い姿に気がついて、その無力を知って、如来の救済の力、本願の力に一切を委せたのであります。「觀無量壽經」がこの物語を繰り広げていく間に、独特の「人間論」が説かれます、それは三輩九品と云って大きく分けて上中下の三つの類型の人間の型を分け、さらに細かくその三つを各々また上中下の三つに分け、合せて九つの型の人間型を區別して、その一つ一つについて觀察し反省するのです。これは今日の言葉でいう人

間的実存の探求であります。上品上生に始まって上品中生・上品下生・それから中品では中品上生・中品中生・中品下生・下品では下品上生・下品中生・下品下生——この九つの階位が人間に區別されるというのです。淨土教は上品や中品の人のための教えではなく、下品のための教えであります。上品や中品は生れながら優れた素質を持った人達であり、放って置いても自分の力で修行をして、迷いを転じて悟りを開くこともできますが、下品は如来の本願力に頼りきるより他に救われる道のない人達であります。この人達の救済こそ必要なのであります。

唐の善導大師は「觀無量壽經」の註釈書を書いておりますが、その中で、

「決定して深く信ず、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり。曠劫^{くわうこく}よりこのかた、常に没し常に派転して出離の縁あることなしと。」と書いております。自己の眞の姿を追及して、ついに自らのあるがままの姿は罪惡生死の凡夫であることに目覺めたのであります。主体的に自己を罪惡生死の凡夫として把えたのです。善導大師は法然上人よりも五百年も前の人で、しかも遠く離れた中国の人ですが、善導の思想、とくにこのお経の註釈書は、法然に深い影響を与えて、法然上人をして「偏に善導に依る」ということを標榜

させたほどでして、法然上人の人間探求もそっくりこの善導の歩んだ道を歩いたのであります。法然上人は、「十悪の法然房が念仏して往生せんというなり。愚痴の法然房が念仏して往生せんというなり。」といって、自分を十悪、愚痴として反省しました。「智慧の眼、盲い、行法の足なえたるこの頃のわれら」ともいっております。親鸞は法然の晩年の円熟した人格から深い影響を受けて、人間観においても師の法然と同じように、「煩惱熾盛^{しじよう}、罪惡、深重のわが身」と歎いております。

「觀無量壽經」を通しての法然上人や親鸞聖人のこのような人間観は、日本仏教独特のもので、一般にそれまでは罪惡は過去の宿業である、幾代も、幾十代も、いや幾百代も前からの、罪業を背負っているのがわれわれであって、その意味で人間の罪業は深いというのでありましたが、法然や親鸞の罪惡観はそれだけではなく、将来の罪惡の責任が自分にある、というところまで反省したのでしょう。法然上人は自分を「十惡の法然房」といっていますが、すでに自分が数々の罪を犯したという罪苦に悩まされているのではなく、むしろいついかなる所で、どのような罪をも犯しかねないともわからない、という人間の底知れぬ愚かさ、自分の頼りなさに戦っているのです。罪惡観は日本仏

教において真に主体的となったので、罪は自分の心のうちに見出されたのです。このようなはかない人間の救いこそ、如来の本願力によらなければならない、というのが「觀無量壽經」の教えであります。

四

終りに「阿彌陀經。」

「舍利弗よ、汝が意において、いかんぞ彼の仏を何が故ぞ阿彌陀と号^{なづ}けたてまつる。舍利弗よ、かの仏の光明無量にして十方の国を照らして障礙するところなし、是の故に号けて阿彌陀とす。また舍利弗よ、かの仏の壽命および其の人民無量無辺阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名づく。」

これは釈尊が舍利弗に問をかけて、舍利弗の答えを待たず、自ら答えている形式のお経で、大へん感動的な場面の一つであります。「阿彌陀經」は極樂の依報正報すなわち国土の美しさとそこに在す仏や菩薩のめでたさを説いたお経です。言い換えますと宗教生活の楽しさを説いたお経であります。そこでまず極樂の教主である阿彌陀仏とは如何なる仏であるかを説くのですが、その仏の光明が限りないから阿彌陀というのであり、またその仏の壽命もそこに生きる人達の壽命とともに限りがないから阿彌陀と名づけるのだ、という意味です。阿彌陀仏は阿彌陀婆（アミタブハ

し」と阿弥陀奥斯（アミタユス）の両義があるとされています。無量光仏と無量寿仏という両つの意味です。阿弥陀仏は限りのない光と限りのない命の仏であるということですが、これは無限の空間と無限の時間ということです。無礙光といって何物にも障えられない光とは、無限の空間を意味するのですし、無量寿といって量り知れない命を持つものは、無限の時間を意味するのです。そこに生きる人達もまた無限の生命に生きることができるというのです。

前にも申しましたように、法蔵比丘は数々の菩薩行を成就して仏となりましたのでありますが、その修行は一口にいえば、智慧と慈悲の修行でした。仏道は智慧がそのまま慈悲として発動さるということに他なりません。今の言葉でいえば、高い知性に裏づけられた愛の実践であります。阿弥陀仏は悲智円満の仏でありますから、この仏が作りあげている世界、極楽浄土は正しく智慧と慈悲によって作り上げられている心の世界に他なりません。法然上人は、「四十八願が浄土を莊嚴する（飾って作り上げる）のである。浄土の蓮の池、宝の楼閣、何一つとして本願の力によって出来たものでないものはない。」と云っております。浄土は衆生救済の愛の働きで出来ている世界に他ならないのです。南無阿弥陀仏によって如来に導かれ護られて、この世界に

生きることが往生極楽であります。「阿弥陀経」には、「舍利弗よ、衆生、聞かん者はまさに発願して彼の国に生れんと願ずべし。ゆえはいかん。かくの如きの諸の上善人と俱に一处に会することを得ればなり。」上に述べた宗教的世界の楽しさを聞くであろう者は、その世界に生きようと願うがよろしい。多くの優れた人達と共に一つの処に生きることが出来るからである、というであります。

「阿弥陀経」の後半の殆んど全部は、信仰の大切であることを説いています。宗教生活は日常のわれわれの浅はかな知識ではとうてい計ることはできない。そのような常識的な計らいを超えた信仰によって、如来の本願力を信じてこれに帰依するのでなければ、とうてい宗教の生活にはいれない、ということをお話しております。法然上人は日常のたんなる人間的な知性を超えた信仰を、「この信ひろくして広大の信心なり。」と云っております。これが本願の不思議ということでもあります。これによらなければ、宗教生活の清らかな幸福を得ることはできないのであります。これで三部経の概略をお話しました。

（NHK第二より放送の要旨）

（筆者・大正大学教授）



近代高僧伝

輪島聞声

送って降伏を勧めた。しかるに城主は之を拒否したために海と陸との猛攻にあえなく陥落し、頼みとした砲台も火を吹かず、城主は津輕にのがれたが、城下町福山は灰燼に帰し、甚だしい惨禍は目をおうものがあつた。「こと子」の生家輪島屋も例外ではなかつた。

夫に別れ、妻を失い、子の行方を求める母親の姿、飢に泣く子をいだいて途方にくれる無常を目のあたり見た「こと子」は、かねて聞く仏の世界にあこがれ、和田瑤門について

国学漢学を修める傍ら、仏典を学んだ。明治二年十八歳の時のことである。同九年四月には更に名師について教えを受けたいと父母の許しを得て単身上京、回向院福田行誠の門を叩いて弟子となり、髪をおろして名も聞声と改め、本所感應寺に居住することになった。

以来四年間ここから行誠のもとに通つて勉強と修行にはげんだが、ひるまず続ける熱意と勝れた才能に動かされ、遂には、行誠も京都遊学をすすめ、知恩院山内の宗学校に入学させた。京都では幸運にめぐまれ、当時仏教学の第一人者と言われた泉涌寺の佐伯旭雅にも師事し、男僧の間に互し、少しもひけをとる

浄土宗尼僧の歴史は長く、尼僧の教化が家庭の奥深くまで浸透させた努力も認めなければならぬが、其の尼僧が「庵主さん」という愛称のもとに、自由の天地をあたえられて活躍するようになったのも徳川封建制の時代を脱し、明治の世が訪づれてからのことであつた。中でも久我誓円、輪島聞声、内田貞音、堀田本真、同諦真、八幡祐観、久世成章、木原円隆という人達の活躍は、夫々の分野においてめざましいものがあつた。

嘉永五年（一八五二）といえ、日本の夜明けともいうべき開港の前年に當つていた。この年の五月十五日、北海道の西南端、松前

氏の城下町福山の旧家輪島屋に、父太左衛門の三女として産声を挙げた「こと子」は、信仰深い父母のあたたかい手に育てられ、念仏読経の声を子守歌として、仏と親のいつくしみの中に生長していった。しかし穏やかな平和な生活も長くは続かず、江戸が開城され、王政復古の号令が下り、江戸が東京と改められ、都は東京に移されても、天皇親政に反対する心なき人たちは徳川家の再興を計り、幕府政治の再現を夢見ていた。幕府の海軍副總裁榎本武揚も其の一人であつた。彼は軍艦八隻を率いて品川を脱出し、北海道函館に渡り、五稜廓により松前城主松前徳広に使者を

ことなく唯一人の女性としてあまえることもなしに、俱舎唯識を学んだのであった。然し僧中唯一の尼僧ということで、尼僧なるが故にひけをとったと言われるのは心もとないと、苦勞も人一倍であつたらしく、曾って「自分が女でもって、俱舎唯識の講義を聞きに参つたが、たった一人だったから苦勞をした。だから尼衆学校というようなものを立てたい。女性にも勉強させたい」と口ぐせのように語っていたということである。その結果時の知恩院門跡福田行誠の援助によって知恩院山内入信院に尼衆教場を創立したが、師と仰ぐ行誠も日ならずして同廿一年四月廿五日遷化せられたから、設立僅か二ヶ月が行誠の被護下にあつたわけである。ここにも無常の風がふきすさんでいた。行誠の寂後、その経営を法姉内田貞音にゆだね、自からは上京して荒れはてた自坊感應寺の住職となつたが、聞声の耳にはなれなかつたのは、師行誠より受けた箴言「亡者の導師にのみ伍することなく、生者の善知識となつて仏命に契うことをつとめよ」という言葉であつた。死者をのみ弔うことに終始するのが、僧侶にあたえられ

た使命ではない。生けるものに法を説き、思想善導にみちびくのが、より以上に期待されている道なのである。此の箴言が尼の生涯におけるバックボーンになっていたという。聞声尼が八幡祐観尼と共に小石川伝通院の山内に、「回向ばかりが僧としてのつとめではない。女子教育に立たなければならぬ。女子教育にも自分の志をたてたい」という大悲願をおこして淑徳女学校を設立したのは同二十五年九月、四十一歳の時であつた。創立当時の学校は生徒僅かに五、六人という寂しさで、名は監督といつても先生もやれば、拭き掃除もやるという状態で、法尼は経済的にも大変苦勞なされたということである。常に口ぐせのように「進み行く世におくれな、有為な人間になれよ」と慈愛をこめてさとされ「まごころをこめて」教育の道に専念した、法尼の教育愛をここにも汲みとることができるのである。されば数人しか擁しなかつた学校から、今日の大学園をつくる礎石として、其の中心となつて活躍された聞声尼の姿は高く評価さるべきであらう。同四十五年五月監督としての職を辞し、二十年の長きに

及んで女子教育興隆のためにつくされた育英の生活にピリオドをうち、法悦の生活に入ることになった。鎌倉の扇谷に聞声庵というさやかな庵をつくつて、静かに念仏三昧を修することになったのである。或時には知恩院山内の勢至堂におこもりして毎日百万遍の念仏をとえ自行の策励にもつとめ、時には指頭をきりとり、したたる血をもつて梵網經、華嚴經普賢行願品を浄書し、又法華經十卷も血書したことがあつたという。前者は浅草寺に現存しているということであり、後者は竹生島の弁財天に納められたと伝えられているが、こうと心に誓えば万難をはいしてまでやりぬくというのが法尼の信念であつた。この信念をもつてしたればこそ女子教育に挺身することが出来、尼僧の頂点に立ち、福田会をつくり、諸名士の夫人方を擁して淑徳婦人会を設立することができたのである。おしくも大正九年四月三日六十七歳を一期に此の世を、去つて浄土に帰られた。法名を寂蓮社静譽上人念阿弥陀仏聞声法尼という。

(大橋俊雄)

インド紀行(8)

——マドラスにて——

齊藤 昭俊

インドにもショバ屋がいる。つまり汽車の座席をとってお金を貰うのである。インドの汽車は本数が少くて戦争直後の日本よりは少しましだというところである。大して高くはないショバ代だが、これが警官とグルになっているのだから面白い。こんなところでピンハネをやつて、いささかの飯代をかせごうと云うわけでもあるまいが、インドでは兎に角役人というと誰れでも待遇がいいし、誰れもがなりたいと願っている身分であつて、どんな下級な役人でも食つていかれるようになってゐる。だから役人になることは大したものなのだが、職権を利用して懐をこやす輩が多いようである。こんなショバ屋の厄介になつ

てグルトゥールからマドラスまで出て来たら、こんどは面白いボン引きに出会つた。こいつは私の探している宿屋をタクシーと一緒に乗り込んで探してくれ、荷物も運んでくれて、さてお金を請求するわけである。その後で街で会つたら、何か御用はありませんかという。女の子は如何です。日本の女でも、中国の女でも、インド人でもお好み次第ですという。まさか日本の女がこんなところにいるとは思わなかつたし、さして氣にも留めずにしたことは残念であつた。或は日本の女がいたかも知れない。人買いの手で外国に流れている者も相当いるということだから。前に或る人から日本の女がいるというので行

つて見たら日本語を片言喋べる女であつた。うな、それは日本という名でつっているらしい。これはカルカッタでマドラスと同じ港町のことである。

南インドの門といわれるマドラス、インドの四大都市の一つ、ここマドラスは確かに海が近いせいか、ベナレスなんかから比べたら夏でも格段の相違がある。第一吹く風が涼しい。これは暑いベナレスに居た私にとっては全く有難い。そして中華料理店があることが大きな魅力である。中華料理がここでいくらか食べられるのは嬉しいことだが、インドでも大都会に行くと大抵あるのだから、支那人の進出のすばらしさを物語っていることになる。マドラスでは大抵のやつが英語を話す。すべて英語で通ずる所である。靴みがき、新聞売り、ポーター皆それぞれに喋る。北インドはそうは通じないが、南インドはやはり始めて西洋人の上陸を印した地であり、キリスト教が早くから流布した処であることを物語る。そして又物が總体的に安い。コーヒーは十円位でのめるし、宿屋も一日二百円位(食事なし)で泊まれる。これはベッド・ハ



南インドの小学生達

ウスと違って、ちゃんとした個室にベッドが一つ或は二つ置いてある。勿論その他の附属品は机に椅子一つだけではあるが。私の想像していた南インドは緑の草に包まれた、青々とした南国だったがマドラスは高い椰子の木、そして赤い土であった。南ももっと南へ下り、更に東海岸に行くと南国らしい風景になる。セイロンがそうである。インドに二十年もいるマドラスの齒科医の東さんは南インドは北インドに比べ人は凡ていいように云うが実は南インドの人は本当の友人となること

が出来ないし、やることが遅く、下手である。北インドは真の友に選べるし、やることが早く、旺盛なる意気があるというのである。この言葉は今までの私の南インド観をくつがえすものであったが、滞印二年になるとこの言葉が分るような気がする。私達にはやはり外見的に物が高くなり、正直なところがなく、概して北インドに比べたら綺麗だという感じがする。マドラスの女の人立派な服装をしていても裸足で歩いている。裸足は南の方が多い。これは全く気候的な理由による。つまり北には焼けつくような暑さがあるが、南にはそれがない。北には冷気を感じるが南にはそれが無いことである。

海岸通りや中心街だとマドラスはインドを忘れさせる。もっとも大都会の性格からしてそうだが、インドには大きな違いがある。大数の人は裸足で歩いているし、額に色々粉をぬっているが、これはどうにもならない。しかし滅多に西洋音楽なんて聞けないのに、今私の泊まっている宿ではラジオがそれをやっている。インド音楽の単調さに比べたらやっぱりこれはいける。やはり大きな違いは建

物である。マドラスとは限らず、ニュー・デリーなどはとりわけそうだが建物の街という感じがする。だから日本の家並みを見ると小さい家がちょこちょこ立ち並んでいるのが妙に目につくものである。バスで博物館に行ったり、トリプリケーンのヒन्दュー寺院に行ったり海岸通りを見たり、アドヤーの神智学会本部を訪れたりしたが、一番の圧巻はやはり博物館であった。

マドラスのバスの車掌(インドは全部男、女はまれである)は口笛で発車、停車を合図する。車掌になるためには、これはどうしてもうまくなくてはならない。マドラスではよく中国人と云われたものだが、やはり中国人の進出の遅しさを物語るものであろう。私はやはり日本人と云って貰いたかったのだが、マドラスもそうだし、他の都会もそうだが、中心街をはずれると極めて、ごみごみした不潔な町になる。レストランも壁が頭の油で黒くなり、床は水で汚れている。こういう中でインドは動いている。何か知らない強いもので動かされている。インド的なものに誰れも知らずに包み込まれている。

身

辺

雑

記

(一)

死に對するもの



森 赫 子

娘が年頃になつて失明し、絶望のあまり、家人の目を盗んでは自殺をしようとして困る、一体どうしたらいいだろうか。

或る日、私はそんな相談をうけた。

いつのまにかこの様な相談をうける程、失明者の先輩格になつてゐる私自身に苦笑しながら、私は死なせておやりになつたらいいと答えていた。

逆説でもなんでも無い、本当に私はそう思つていた言葉なのである。死にたいものには死なせてやること、これが一見冷酷なようで当人に対してはもつともあたたかい心やりであることを私は知つていた。

恐らく彼女は失明のその日から死を考えたことだろう。しかし不幸にしてゆつくりと静かに死と対決出来る場を持つことは出来なかつたのではないかと思う。彼女の母親は、黙つていれば一体娘は何を考えているのだろうと憶測し、娘がガス栓に手をやれば、自殺をするのではないかと驚ろき慌て、そのあまりに娘が一番必要としてゐる静かな死との対決の場さえも心なくかき乱してゐたのではないだろうか。わけもなく、オロオロと動きまわるその母親の姿を想像しながら私は、子を思う母の姿として彼女をゆるすことは出来ないのである。

扉の御法語

誰でも自分で自分の心が自由になりません。フト気がつくといつか妄念（迷いの執念）にとりつかれていきます。あるお弟子が上人に質ねました。お念仏は妄念を去り善心にもどつてから申すものでしょうか、それとも心が乱れたり、妄念が起きていたりしている時でも、そのままお念仏を申してよいのでしょうか。これはお弟子の正直な悩みであり、また真剣な疑いでありました。これに對して上人は、「先づ名号を唱えよ」と、扉の御法語の通り教えられました。（決答授手印疑問鈔）

これと同じような御法語が他にもあります。（十六門記）それによれば、「妄念おさふるに起きて、止み難く、散乱いよいよまして静かならず、この条いかが候や」と鎮西の聖光房と聖覚のお二人が上人に質ねたとあります。これに對して上人は、

「願生の心の少なきにも南無あみだ仏、散乱の増すときも南無あみだ仏、妄念の起るときも南無あみだ仏、善心の起るときも南無あみだ仏、不浄の時も南無あみだ仏、清

倅いにして私の場合は、死のうと思えば、いつでも死ねる静寂と自由があつた。見えぬ目に、ほのかな花の香をかいだような記憶もある。多分そつと私を慰めようとして誰かが活けてくれたものだつたかも知れない。私は死のうと思えばいつでも死ねたのである。

しかし私はそういう静かさの中で、生きることを選んだ。実に何気なく、もう少し生きていようと思つた。

そんなものなのである。だから私は自分の身を振りかえつて、死にたいと思うものには死なせておやりなさい。……と娘の母親にいつたのであつた。

娘は私と違つて或は死を撰ぶかも知れない。そうしたらそのとき初めて彼女の行為を邪魔すればいいのだ。死のうとしても死なせない。今度こそ本当に冷酷な作業を終生つづけられたい。但し、その母親が生ることがいいことだという強い確信がなければ無理である。私が母親なら娘の死を邪魔する。何故なら、私は生きることがいいことだと思つてゐるからである。

近頃、私は外出をあまりしないので大変風邪をひきやすくなった。するときまつて左のまだ生きている目が痛烈にいたむのである。恐らく性悪なビールスかなにかが氣息エンエンの目の神経をおかすのであらうが、ひと度これにやられると、たえられないような痛みを覚え、涙がポロポロ出る。それにひきかえ死んだ右目の方ときたら、まつたくケロッとして痛くもかゆくもないのである。

私は、勿論視力はないが、死んだ目と生きた目の二つながらを持っている。そして生きた目にいまだにさいなまれているわけだが……、やがて、その苦痛もあじわえなくなる日がまたいつかやつてこないとも限らない……そのときはやつぱり淋しいことだと思ふ……とにかく生きる或いは生きているというものは、いづれにしても苦しいことには違ひないが……しかし私はやつぱり生きている方がいいと思つてゐるのである。

（元新派女優、昭和卅一年に失明、後著「述生活に入る。著書「女優」その他がある。」）

浄の時も南無あみだ仏、三心の欠けたるにも南無あみだ仏、三心現起するにも南無あみだ仏、三心成就するにも南無あみだ仏、これすなわち決定往生の方便なり。心腑に納めて忘るゝことなかれ」

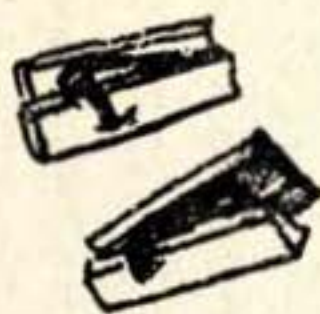
と申されました。心の準備がどうあらうとも、自分の環境がどうであらうと、お念仏を申す暮しには、何んのさわりにならぬことを示されています。かかることが問題にならぬというばかりでなく、お念仏に徹するならば道が自ら開け、すべてが解決していくのであります。

「もし能く称名すれば、仏名の徳として妄念自らやみ、散乱自ら静り、三業自ら調いて、願心自らおこるなり」

とも申されていますが、このお詞を有難く頂くとともに、信仰が生れ育つてゆくのであります。

特に扉の御法語には、妄念に悩み、乱心に苦しむ者をこそ化すことを目的に、あみだ仏の本願があるのだと、はっきり申されています。名号の徳として妄念がやみ、願心が生ずるが、実はこれこそ本願の元意であり、仏さまのお力であるのです。

横川への道



高橋良和

(中外日報記者)

比叡山の横川へジープが出るからという連絡があったので、急に思い立って、横川に行くことにした。

私は昔から横川ということばを聞くと非常になつかしく感じているのであるが、これは横川が昔ながらの比叡山のおもかげを残しているだろうと思うからである。

最近の比叡山はとても便利になって、全く京都市内と同じように、京都駅から比叡山の根本中堂や、四明嶽に行くバスがひっきりなしに出るし、夏など夜の比叡山への納涼バスも出て、浴衣がけてこのひまをみて出かけられるからなのである。

昔は坂本から胸つきの坂をのぼった人たちも、その後ケーブルが京都からと、坂本からついたのでよほど歩かなくてすむと思っていたのに、今日この頃は根本中堂横に大型の観光バスが駐車することになったのであるから、便利なものであるが、それだけ俗化したとか、汚されたとかということばも出るものの、忙しい人たちや、観光客にはなんといっても便利なことには変りはないのである。

そこで横川となると、もう人里はなれていて、よほどでないとジープなどが出ないので、昔の比叡の姿にふれたいと思うと、

つい横川と口に出るのである。

御存知のように、比叡山は、昔から三塔十六谷に分れているので、三塔とは、東塔、西塔、横川といい、この下に十六の谷があり、昔でいう三千坊が配置されていたので、その構造の悠大さにおどろくのである。

横川は坂本から約五十丁北にあたるところであって、元三大師の由緒ある大地であるし、落雷で焼けた横川中堂の跡は首楞嚴院の礎石などがあるが、その中心となる四季講堂、即ち元三大師堂はどつしりと昔のままに残されているのである。

ジープの道だつてとても難関で、ときどきは川のなかに乗り入れたり、道が川になったところを走らなければならないので、うっかりするとふりおとされてしまう。

でもジープに乗って横川についたときには本当にやってきてよかったと思ったのである。というのは、私は仕事の関係で方々のお寺々に参り、各宗祖師の修行の地を訪ねても、なんといっても比叡山は法然上人の修身の地であったから、どの峰、どの谷

を眺め、訪ねてもたまらなく祖師のみあとを慕う気持ちが一ぱいににじみ出るのである。

横川へやってきたのもその一つであって、大木の横の苔むした石を眺めても、ここに法然上人が坐られたのではないかと思うと、その石にあたたかい血の通いを感じるのである。

比叡山には法然上人遺跡がそうあるわけではない。わずかに名が残っているのには法然堂がある。然しその建物より山全体からうける宗祖へのなつかしさがこよなくうれしいのであって、その昔法然上人が歩かれたこの道を今自分が歩いていることによつて、上人のわらじのあとに今自分の歩いている靴あとの一つがびったりとはまっているように思うからなのである。

横川の冬は麓の谷々より一月も二月も早いのである。だから木々が紅葉するのも早いかもしれない。丁度四季講堂を囲む木々は黄色、赤とすっかり霜にとけて、もう冬の用意を終わってしまったている。

古い四季講堂で拝礼を終えて、書院でし

ばらく休ませてもらった。横川という名は比叡山の歴史の上でよく知られてはいるが、実際この横川を訪ねる人は天台宗でも珍らしいので、比叡山の一山の僧侶が輪番でこの横川の当番にあたるので、この頃では月何回かのその往復にジープが用いられるので、歩く人はいよいよ少なくなったのである。

輪番とはなしをしているとかえりのジープがまた山をおりするというしらせがあった。横川を訪ねるのは何年ぶりかだったので、ゆっくりと思ったのだが、自分の足で五十丁の坂道それに雨あがりの山道では無理であるので、またジープの力を借りなければならぬ。

ジープにはもう五六人の人たちが乗っていた。私も予定されていたので、ジープの助手席に席を占めて、下りの道をつかましながら下ったのである。

途中ジープは何度か傾いて、みんなをビツクリさせた。そのとき私はその道に大きくなわらじのあとをみつけたのである。とたん、

「とめてくれ——」
と声をたてた。

「どうかしたのですか。」

ジープを運転している坂本の人はいった。ギューツと急停車してくれたのでジープから私は思わず、飛びおりたのだった。おどろいてみている同乗の人たちの前で、私は大きなわらじの足跡に自分の靴をあわせてみたのである。

勿論、雨あがりのわらじの跡は私の靴より大きいのであったが、そのわらじの跡を靴で踏んでみて、つくづく思ったのであった。ひよつとしたら法然上人のわらじの跡かもしれない。そう思うときゆつともう一度踏みた。身体の血がわくわくと流れる思いであつたが、他の同乗者にはなんのこともわかる筈がないことである。

八百年の歴史を越える今法然上人が自分の心にはつきりと写ったように感じたのである。うれしかった。だからやっぱり私は比叡山がすきなのである。ジープに乗っている人たちは、不思議そうに私の様子にみとれているのであった。

靈夢

——参議兼隆——

蓮華たんぼの花は、かれんであり美しいものである。はる風が野面を訪うと合奏を始める。

春はよいものである。人々の心も、雪どけと共に眠くなる。

春眠、あかつきを覚えず

と云う。この時、参議兼隆は、夜半からうとうとしただけで、朝を迎えたのであった。

夢を見たのである。昨夜の夢は明らかに脳裡にある。

さても不思議よ。

法然上人の令名は、きいてはいるけれども、そのお念仏信仰とまでは行かなかったのである。

さても不思議よ

と、改めて思うのであった。

時は、師表法然上人が大往生せられる七、八年前、元久一、二年頃の晩春の一日の出来ごとであった。

当時、上人は、北嶺南部の諸山から、そのすすむるお念仏は道德を破るものなり、速かに宣旨を下して停止すべしと、きつい迫害をうけていた。とうとう元久元年十月になると、不穩の挙が再三であった北嶺山徒が蜂起したのである。

かの後白河法皇さまさえも、意のままにならぬもの三つあり、一は山徒、二は加茂川の水、三はすぐ六のさいであると嘆ぜられたと伝えられる山徒である。彼らをおさえる何ものもない。

彼らは、念仏教団が、放逸であって、仏教徒の「つらよごし」と云うにあった。放逸と云われたことは、聖道門の人々は、自ら苦行しては、もとのもくあみに戻っているつまらなさよと悪口を云う。或は念仏門に戒行なしとして、婬酒をほしいまま行なう。又お念仏さえ唱なえていれば、悪いことを行っても、念仏の功德によって救わ

れる。

なぞとしていると云うにあった。

法然上人は、かかる風聞をきかれると大変に驚かれた。御伝記類には、

「上人、心神驚怖す」

と伝えられている、まさに寝耳に水の驚きであった。十一月七日、京都（洛西）嵯峨の二尊院で心身を清められ念仏をとえつつ、七ヶ条の起請文を作られ、所在の高第八十余人ついで百十名ほどが連署、相共に教団の自肅自戒と教団から、そのような風聞あるとすれば充分「いましめる」として山徒の首座真性座主に申送ったのである。

翌年十二月廿九日には、南都興福寺衆徒も又不穩のことあり、白疏を捧げた。後鳥羽上皇は宣旨を下して、

「法然上人の罪ではない、門下のうち浅智の者の罪なり」

として、衆徒を慰撫するところがあつた。浄土宗にとっては内憂外患の秋であつたのである。

二

兼隆は、かかる状態と、大勢力のある旧教団人から正式の圧力とを見ては、法然上人の念仏が、果して往生し得るものなるや否やと、心中ひそかに疑っていた訳である。夢はこれに対して、

人ありておほきなる雙紙を披見す。これを見れば、諸人の往生をしるせり。もし法然上人の往生を、しるすところやあると、見もてゆくに、はるかのおくに、上人臨終の時は、光明遍照、十方世界、念仏衆生、撰取不捨の文を誦して、往生し給べしとしるせり。

としている。

往生の相を示している、兼隆の心中の疑を決定された訳である。

この草紙は、諸行往生するも、法然上人のお念仏は、阿弥陀如来の本願を信じて、ひたすら一心に口称念仏する時は、誰でも往生出来る。

月影の いたらぬ里は 無けれども

眺むる人の ところにぞすむ

は法然上人のみ教えをよく示している。爾後の人々は、唱うれば往生出来るから、往生人の名を記さないとすることを端的に物語っている。

さてかかる元久一、二年の間に、法然上人の教団では、元年十一月卅日に前皇太后宮大夫従三位藤原俊成、二年二月廿七日前右京権大夫藤原隆信、五月十一日従二位藤原範季、十一月十五日鎌倉御家人相馬次郎師常、この年小倉上人（蘭田智明）等が、称名念仏裡往生している。中でも藤原範季は、五色の糸をひき、如法の臨終行儀を行っていることは注目されてよい。

当時の記録によるなれば、臨終行儀は、阿弥陀像（又は画像）を病床のみぎ（西の方、今は臨終と思われる時は、頭北面西とする）に安置、香花を供え、御仏の手から五色の糸をひき、病者にとらせ、念仏を助音することであった。

上人は四月十五日には、後に一向宗祖となった親鸞上人に、選択集を授けられてい

る。

上人は、一日と雖も休むことなく、称名念仏の弘通に精進されていた、そこに「信」の有難さを見る。

三

建暦二年正月廿五日、東山大谷の禪房に於いて、上人大往生の時、光明遍照の文を唱えて、正念入寂せられたのである。兼隆が七・八年以前見た夢告の通りであった。兼隆は、これから念仏の行者となった。又夢じらせの事を諸人にもおおらかに語り伝えることが出来たのである。

（村上 博了）

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

きいたお祈り



伊 東 拳 位

さし絵 加藤 金一

むかしある所に、一派なお坊さんの、法話を聞こうとして、この
つの国がありました。寺に集ってきました。

殿様は、たいしたかしこい方でもなく、とい
ってべつにおろかな方しました。

でもなく、平凡な方
でした。国の中も、とく
殿様や、家臣の人々に、話をしました。

べつにりっぱというわ
けでもなく、良い人も
殿「では仏さまを信じたら、どんな良いこ
とがあるのかね」

いれば、少し悪いやつ
もいるという、しごく
僧「すべてを仏さまにおまかせして、安心
した心で、暮せます」

あたりまえの国で、と
きどきは、火事もあつ
殿「仏は、病気を治したり、貧しい者を、
金持にしてくれるかね」

たり、水も出たりす
る、ありふれた所で
僧「仏は、心の病氣、心の貧乏を救って
くれます。心のもち方により、心の病氣
を治し、貧しい暮しも、心ゆたかに、

ある年のこと、何や
ら宗の本山から、大僧
殿「では、めくらの目が明いたり、いざり
が治って、歩けるようになったり、し
ないものかね」

正という坊さんが、此
の城下の町へきて、大
僧「仏さまは、そのような奇せきは、いた
しません。心の目を開き、世の中のこ
とを、さとることが、仏の教えです」

きなお寺に泊り、説教
をしました。
町の人々は、この立

殿「それでは、何かものたりぬが」

僧「仏にお祈りして、人々の願い通りにな

ったりしては、かえってやっかいでござい

ましよう。それより自分の心が、

うつくしくなることが幸せでしょう」

こんな話がすんで、大僧正は帰っていきま

したが、殿様も、家臣たちも、何だか、わか

ったような、わからないような心でした。

さてそれから半年ほどした時、この城下の

町はずれにある、行者堂に、何とか教の行者

という、髪の毛を長くのばし、色の黒い。目

のキラキラ光る、男がやってきて。

行「何でも願い事があったら、神様にお祈

りして上げます」

と、ふれ歩きました。それを聞くと、さっ

そくお祈りの人がやってきました。

男「私は此のように、目は開いているが、

何も見えないのですが、治していただ

けますか」

行「それは、そこひというのだろう。よし

よし神様に、おいのりしてやるぞ……

ムニヤムニヤムニヤムニヤエ

ッ、さあ、治った、見てごらん……」

男「ハッ……」

男は、こわごわあたりを、見まわしました。

見えます、何もかも、良く見えます。

男「オー、みえます、みえますよくみえま

す。ありがとうございます……」

男は大よろこびで、たくさんのお金を、神

さまに供えて、帰って行きました。

行「次は」

婆「はい私でございます」

行「おばあさんは、何のお願いだね」

婆「私は、ながい間、左手が不自由で、肩

より上に手が上りません」

行「よしよしそこへおすわり……ムニヤム

ニヤムニヤムニヤエ……それ治っ

た……さあ、左の手をあげてごらん……

……」

婆「ハイハイ、こうでございますか……」

行「そうだ、それ上ったろう」

なる程、左手は、らくらくと上の方へ、上

げられました。

婆「ああ、あがりました。ありがとうございます

います」

行「神様のおかげだ、お供物をしておいで」

婆「ハイハイ、たくさんいただきます」

おばあさんは、お金をたくさんあげて、い

そいそと、帰っていきました。

さあこうなると、評ばんが、ますますたか

くなり、次々と、いろいろな者が、たずねて

きて、いろいろな願い事をいたします。

いざりがきました。帰りには、立ち上って

かけ出して帰りました。

長い間ねていた病人が、むすこにおぶさっ

てきました。これもケロリと治って、元気

に帰っていきました。

此のように、願い事が、きいてもらえると

なると、こんどは病氣ばかりではありません、

いろいろなことを、祈る人が出てきました。

行「おまえは何をお願いするのかね」

○「私はこの町の、金兵衛という、呉服屋

でございますが、何分にも町に、呉服

屋が多いので、なかなか思うように売

れませんので、どうぞお客がたくさん

くるようにおねがいします」

行「よしよし神様にお祈りしてやる……ム

ニヤムニヤムニヤムニヤエ……

さあこれでよい帰ってごらん」



が、一ぱいの人ばかりとい
うぐあいです。

そのうち一人の呉服屋が
かんがえました。それは、

「自分の店だけ残って、ほ
かの店が、つぶれるように
してやれ」

すぐ行者の所へきて

呉「他の店が、みんな焼

けてしまいますよう

に、おねがいしま

す」

行「よしよし……ムニヤ

ムニヤムニヤムニヤ

ムニヤヤッさあ帰ってごらん」

帰りの道で、方々に火事があり、この男の
家だけが無事で、ほかの呉服屋は、みな焼け
なりました。

これがわかると、ほかの呉服屋は

「あの店の主人が、うごけない病人になり

ますように」

すると金兵衛の店に、お客がやってきます。
そこで金兵衛が、又行者の所へ行きます。
そこで又、ほかの店が行者にたのむと、金兵
衛や、他の店の客が、いなくなりその店だけ

こんなことは、たちまち町中にひろまった
ので、いよいよ神様へは、いろいろなことを

頼みにきますが、神様は何でもきいてくれま
すので、国の中はたいへんです。

○「あいつは、しゃくにさわるやつです、
どうぞめくらにしてください」

というと、いのられた男は、めくらになっ
てしまいました。それと知った男は、

男「どうぞ、あの男を、きちがいにして下
さい」

とたのみますと、神様はたちまち、願いを
ききとどけ、きちがいにしてしまいました。

こんなことが、大ぜいの間で、くりかえさ
れたので、国の中は、おたがいに祈りあい、

狂人が出たり、いざりが出たり、めくらにな
ったり、火事になったり、たいへんなことに
なりました。

そのため国の中の人々は、何となく安心の

できない。人の様子ばかりをみている、いや
な世の中になってしまいました。

この事を知った殿様は、役人をして、い
ろいろ調べさせました。そして
家「行者の祈ることを、神様がよくいうこ

とをきいて、願ひ事をかなえるので、
このような世の中になりました」
と報告しました。

此の時殿様は、まえの僧正のいった。仏の
教えのことを思いだしました。

「仏様は、金持にしたり、病気をなおし
たりしない、心をゆたかにして、たの
しいくらしができるのだ……なるほ
ど、神や仏が、人間の願ひ事を、何で
もききいれては、こんな世の中になる
のだった。やはり仏の教えは正しかっ
た。」

殿様は、さっそく行者を呼び出しました。

殿「おまえは、神への祈りをするそうだが
そのとうりか」

行「はい私の祈りは、神様がかならず、き
きとどけてくれます」

殿「しかしそのために、大ぜいの者が、人
を苦しめあうではないか」

行「それは私の知ったことでは、ござりま
せん。私はただ、たのまれるままに、

神様へ、祈るだけでございます」

殿「たわけ者、たとえ信者のねがいとはい

え、人をきずつけ、人をのろうことを
神に祈るとは何事だ……おまえの祈り
を、神がきき届けたために、大ぜいの
者が、不幸なめにあっているのだ。そ
の罪はゆるされぬ……役人、このもの
を牢に入れてしまえ。」
こうして、行者は牢に入れられてしまいま
したので、ようやく町の中は、落ついて、人
々も安心しました。そしてみんなは、
「神様や仏様が、われわれの願ひごとに、
いう通りのごりやくをあ
たえていたら、たいへん
なことになる。私たち
は、心に安心をあたえて
くださる教えこそ、一ば
んよいことだったのだ」
とさとり、それから、
正しい仏の教えを信じる
ようになりました。

(おわり)



謹賀新年

法然人上鑽仰会

信仰相談

解答者 竹中 信常

姑の信仰と家庭内の
出来ごとを調整する
にはどうしたらよい
か

——おたずね——

私の姑は非常に熱心な念仏信者で、お寺参りもよくしますし、家でも朝夕よくお念仏を唱えておりますが、そうした信仰と家庭内のこととの点についてお伺いしたいと存じます。

私の夫は長男で、私共夫婦と子供二人で暮しております。夫の母である姑は夫の弟達——まだ独身です——と一緒に少しはなれたところに家を持って暮しています。ところが、夫が本年四月病気になるに至りました。上の男の子を姑にあづけることに致しました。始めの間は何ともなかったのですが、この二三ヶ月、子供の通っている幼稚園で絵のおけいこをさせているのを余けい

なことだとか、幼稚園へ通わせるのはせいたくだとかといい、子供が絵を書いているのをやめさせたり、こと毎に子供に当るようになって来ました。私も夫が病氣なので何かの足しにと内職をしたりして、少々ですが姑へ月々渡ししており、弟達もそれぞれつとめているので大して負担をかけてないと思うのです。

毎月六日にはお寺の講があつて、それにはかかさず出席し、お念仏を唱え、人にも色々と話を聞かせている信仰深い姑が、どおして孫を可愛がつてくれないのか、不思議でたまりません。信仰というものは、口でお念仏を唱えてさえいればよいものなのでしょうか。よその人には立派なことをいっていて、自分の孫を邪けんにしてもそれで信心家といえるのでしょうか。姑の気持ちをもとのようになおすにはどおしたらよいでしょうか、お教え下さいませ。

(大田区下丸子、主婦二十八才)

貴女も姑さんの信仰
に入つて一諸になつ
て考えることです

——お答え——

姑さんがお念仏を一生懸命におとなえになり、お寺に講が開かれているという文面から察しまして、恐らく、そのお宗旨は浄土真宗かと思われまします。真宗のお念仏は報恩謝徳の念仏と申しまして、如来様のお力によつて私共衆生はすべて救われていると自覚し、そのおはからいに対して有難うございましてお礼の意味でお念仏をするのです。ですから、お姑さんが唱えられるお念仏の本當の気持ちとは、自分丈けのお念仏でなく、家中の者全部の者が救われている、そのことに對するお礼の気持ちでなければなりません。また、そのような気持ちで毎日を暮しておいでになれば、心は平らかにおだやかになつて、孫さんにもやさしいおばあさんであるべきです。

それなのにお手紙のような仕打ちをなさ

るのは、お念仏が本当に生かされてない。

貴女のいわれるように口先き丈けのお念仏になっっているようです。真宗の信仰は非常に微妙なものでありまして、素直おな気持ちで如来のおはからいをうけるのでないと、大変な間ちがいになることもあります。お姑さんはどうもそのように思われます。お寺でありがたいお説教を沢山きいたり、自分でも一生懸命にお念仏して、他人にも信仰の話をして上げるといふのは大変結構なことですが、余りそのようなことだけ熱中すると、今度はそれが自慢の種になって、真宗でいう「信心ばかり」にもなりかねないのです。そうになると、如来様のありがたさも、お念仏の本当の気持ちも忘れてしまつて、ただ、無やみやたらにお念仏をしたり、人に話をしたりするようになるのです。ブレーキのこわれた自転車で坂道を走ると同じで、非常に危険です。

きつと、姑さんからみると、貴女を始め世間の人が不信心者にみえてならないでしょう。そうして、それにつらなる孫さん

も、何となく憎らしくなるといふわけですね。はつきりそうと自覚しないでも、心の隅にそういった感情が秘んでいて、それがたまたま、自分の幼い頃は幼稚園なんてとてもせいたくなものだったことを思い出したり、絵を習うことが余けいのことのように思えたりするのではないでしょうか。ですから、このことを解決するには二つの方法があると思います。

第一には、姑さんの「信心ばかり」をおとすことです。それには、幸い毎月お寺へお参りにおいでとのことですから、お寺の御住職にお願いをして、本当のお念仏について、よく話をして頂くことです。先にも申しましたように、お念仏の心は素直おに如来様のお力を信ずることなのですから、まづ第一に、平常の心をおだやかにして、えこひいき、好き嫌などの心の波をおさぬようにすることが大切です。信心深い方々の方ですから、常々、自分が尊敬しているお寺のお坊さんから、こんこんと話してきかせて上げれば、きつと分って貰えらる

と思います。それに、長いことではない、病人がよくなるまでのことなのだから、誰が困るのも同じだということを感じて話して頂ければよいと思います。そういうことは、目下^{した}の者や他人から言われると、何か反撥を感じるものですが、菩提寺の住職からだったら、案外スムーズにうけとって頂けるでしょう。

第二には、これも先に書きましたように姑さんの目からみるとみんな不信心者にみえてならないのです。信心はしてみなければ分らぬもの。貴女もお姑さんの信仰についてとや角いっておいでですが、その前に一度、一緒にお寺の講へでもおいでになることです。いくら内職や看護でいそがしいといつても月に一回、半日のひまぐらいは見つけられるでしょう。そして、姑さんと手をつないで声を揃えてお念仏を唱えてみることです。そうすれば、貴女も姑さんの気持ちが少しは分りますし、姑さんもまた貴女のそうした心持ちを嬉しく感じられることでしょう。

釈尊の生涯 (六)



佐藤 密雄

五、出家の生活

サンガ（僧伽）について インドでは出家者の教団のことを、ガナ（伽那）またはサンガ（僧伽）と呼ぶ。いずれも集団の意味であるが、仏教々団はサンガと称した。これがやがて日本などでは、僧または僧侶という言葉で仏教の出家者を呼ぶようになった。

本来、僧伽（サンガ）または略して僧という場合は、四人以上のサンガとしての機能をもつ集団をいうのであって、三人以下では単なる集合であって、サンガとしての機能は認めないのである。また現在の日本では、出家者一人々々を僧ま

たは僧侶というが、これは中国と日本の特種な用い方であって、仏教の僧は本来はサンガ（僧伽）であり、人のことではなかったのである。

仏教では、男性の出家者を比丘といい、女性を比丘尼という。サンガもまた、比丘サンガと比丘尼サンガとの二種に分かれる。二種のなかで、実際は比丘サンガが断然大きく支配的であり、比丘尼サンガは従属的である。しかし、両者の混同するようなことは認められず、両者のおの独立した律制をもって、それに基づいて運営されている。

出家生活の原則 インドの宗教階級であるバラモンの人びとの出家には、妻もともなう出家もあったようであるが、仏

陀時代の非バラモンの出家者たちは、原則として出家とは妻子家族と離れることであり、独身生活であった。生産的なことは一切せずに、食物は乞食してあたえられたものを食し、衣類は一般社会人の捨てた衣料でこれを満たした。住処は樹下などに坐臥し、医薬も、牛を神聖視するためかその小便をもちいていた。

仏教の出家者もこの生活を原則として守り、仏教サンガに入団して比丘となるときには、まずこの乞食などの四種を守って生活することを誓わされる。これを仏教では四依の法と呼ぶ。比丘たるものは、まずこの四依の法を守り、そのうえに仏教で定められた二百五十の禁律を守る生活を要求されるのである。

しかし、四依の生活はいわば出家生活の原則で、非バラモンの出家の発生時代には、この原則の生活がそのままおこなわれたものと考えられる。しかしのちには信者の寄進などがあり、精舎などが出来て野外に臥床することがすくなくなるような場合があつて、原則のみの生活ではなくなつたとみられる。仏陀が各方面に信者をもつた頃は、大部分の出家教団も同じであつたようである。衣食住は、原則的生活が基礎であつたが、食事の招待をうけたときは乞食せずにそれをうけ、衣服の寄進があれば棄てた衣料を拾つて作ることもなく

なつた。住についても、伝道の行先に精舎の奉納されたものがあれば、そこに宿泊することが多くなつてきた。また、社会的な状況も、王舎城や舎衛城などが経済的に発展すると、そこで雨期九十日間を安居する場合も、大きな精舎があり、信者の招待の日程が多く、安居の終るときには新衣の寄進があつて、原則的な生活がむしろ特種に思われる事態もあつたようである。

仏陀の晩年に、いところで仏陀の弟子である提婆が、仏教から分離独立してサンガをつくつた。その実際上の理由はとにかくとして表面上の分離の理由は、提婆が、仏教比丘の生活が出家者の原則的生活から離れつつあるのを改革して、原則を守る生活に還ろうとすることを主張したが、仏陀がそれを承認しなかつたためであるといわれる。提婆の主張はチャイナ派の出家生活に近い主張であるが、当時の厳肅主義者であつたチャイナ派の出家者は、乞食などの原則の生活を嚴重に守っていたのではないかと考えられる。

比丘の資格 仏教の出家者である比丘は、満二十歳に達したもので、身体の欠陥のないもの、国家に勞役その他の義務を負っていないもの、他人に対して借金その他で果すべき義務を負っていないもの、および出家するについて両親の承諾をえたものなどの条件にかなつたものが、仏教で定めた具足

戒という二百五十の禁戒を遵守することを誓ってなるのである。

具足戒とは、通常二百五十戒といわれているものである。

これは仏教にはじめからあったものではなく、仏陀が、弟子の比丘たちに出家としてふさわしくない行ないのあるたびに、今後をいましめられたそのいましめを禁戒としたものである。はじめに異性と交ってはいけないということからはじまって、殺人、盗み、虚言などを禁ずることや、金銭を所持しないこと、余分の衣料などを貯えないこと、食物の貯蔵をしないこと、土地を掘らないことなど、いくたの項目をあげてこれを禁じている。現代には、あるいは実行不能のこともあるが、出家生活の実際に即して二百五十の禁戒をなしているのである。

比丘の禁律 仏教の比丘は、具足戒を受持することを誓う

儀式をおこない、はじめて比丘となるのである。これを受戒という。受戒をなした比丘は、具足戒をまもっていることによって比丘たるのであって、これを犯したならば、他人にまったく知られない場合でも、比丘である資格がなくなるのである。そのような場合は、さっそく自分からサンガに申しでて、定められた懺悔（さんげ）の方法をおこなって罪を淨よめて、比丘である資格を保持するようつとめねばならな

い。

具足戒のなかで、淫と盗と殺人と教法上の虚言を犯したものは、極重罪（波羅夷罪）となる。これは世間の死刑に類するもので、これを犯したものは、サンガを除名されて再び比丘となることはできない。もちろん比丘であることと、宗教の救いにたよることとは別であり、仏教に帰依するには出家たる必要はないのであるから、出家は具足戒をまもるものだけとされるのである。

しかし、この四つのなか、第一の淫は比丘は不淫であって、絶体に女性との交渉を認めない。もし淫を犯すようなことがあれば、比丘たる生活をやめなければならぬが、またつつしんで具足戒をうけて比丘となることができる。仏教では一般の仏教道德として邪淫を禁ずるが、これは正しい夫婦生活のほか、他人の妻を犯すごときを禁ずるのである。

四つの極重罪について、重罪として十三の僧残罪というのがある。これは女性との性的な意味をもつ交際、わるい遊び、サンガを分裂にみちびくような行為が十三あげられている。これを犯したものは、一定期間の拘留生活をさせられて、のちに二十人以上の比丘サンガで罪をゆるされれば清淨になったとするのである。つぎに三十ヶ条の衣服、持もの、金銭などに関する不当所持の禁戒があるが、これは不当所持

したものを捨ててサンガに罪を謝すれば清浄となる。これらのほかの罪を犯した場合は、犯したと思つたときに、ただちにほかの比丘の数人もしくは一人にむかつて罪を悔ゆればよいとされる。そこで、このようにしてみると、四つの極重罪の罰則はきびしいが、そのほかは大体罰はゆるやかである。おそらく、これは比丘も人間であつて禁戒を犯しやすいが、それを気付いたならば、ただちに悔いて、のちのいまいに重点をおいたものと考えられる。

比丘以外の出家者 女性の出家である比丘尼の禁戒も大体比丘と同じであるが、しかし比丘尼は女性であるため、いろいろな点で清浄な生活を犯される危険がおおい。それを予防するためにも禁戒が多く、三百三十八戒ある。比丘と比丘尼とは、満二十歳に達したものが受戒してなるのであるが、二十歳以下のものが出家して、比丘または比丘尼となるまえにサンガのなかに見習い生活をするのを、男性を沙弥といい、女性を沙弥尼というのである。この人びとは、出家の見習いの修行者である。沙弥はそのまま二十歳に達して受戒して比丘となるのであるが、女性の沙弥尼は十六歳から二十歳までをとくに式叉摩那（学生）と名づけて、生理上の体質が出家に適當かどうかを試す期間としている。

もっとも、女性の場合は、二十歳以上のものが出家をもと

める場合も、比丘尼となるまえに、二年間の式叉摩那の生活を必要とする。たとえば妊娠中であれば出家にふさわしくないで、そのようなことのないよう確めるためである。三十歳以上の男子で出家して比丘となる希望のものについても、ほかの宗教から仏教へ改宗させるものについては、四週間の準備期間を沙弥と同じ生活をして、思想上の勉強をしたのちに、受戒して比丘となるように定められている。しかしこの場合にも、拝火教徒と業論者は、仏教に近かい思想をもつので、この四週間の準備期間は免除される。

比丘や比丘尼は一日一食である。朝早く起きて町や村へ乞食に出かけ、その供養をうけたものを正午までに食べ終えるのである。食べ残して保存してはいけない。僧房もしくは宿泊先で、食物をもって夜を過したり、食事の料理することは許されないのである。後世、一定の場所にかぎって、そこでは食事をつくることができた。たとえば、早朝に粥をつくって乞食に出る前にそれを食べることがあった。しかし、原則として乞食による一日一食である。これは、中国や日本でおこなおうとしても不可能なことであつて実行されないが、インドの社会は、出家は食をかんがえず修行に精進することを求めたからである。

比丘の衣服 比丘の衣服は三衣という。下着と上衣と外衣

とである。三種ともに日本の僧侶が袈裟（ケサ）と叫ぶものである。下着はあたかも婦人のスカートのようなもので、日本の僧侶の袈裟のなかで五条とよばれるものに相当する。上衣は主として右肩からかけて上半身を覆うもので、日本の場合は七条といわれるものにあたる。外衣はオーバーともいえるもので、日本の場合に強いてあてはめるならば、九条、二十五条である。

もちろん日本の僧侶のように、着物をきてその上に衣（ころも）を着るようなことはなく、裸身の上に五条の下着をつけ、七条の上衣をかけて日常の仕事なり坐禅をするのである。村や町へ出かけるときは、その上に外衣をつけるのである。この三種のほかには衣類も衣料も所有することは許されない。また、いかなる場合にも、この三衣を身辺から離してはならない。もし外衣ひとつでもどこかへ置きわすれて、一夜を過すことがあると、離衣宿という罪にとわれるのである。

比丘や比丘尼の三衣は、中国や日本では袈裟というが、袈裟とは三衣の色で、これは壊色という意味である。衣料の生地の色を消して、一般人の好まない色とすることである。たとえば、青色の生地はこれに泥色と茜色をもちいて暗褐色にして、壊色とした色合いを袈裟という。中国や日本ではこれ

を比丘の三衣の総称とした。

インドでは、出家者に対して一般社会人を白衣という。日本では白衣を着るのは僧侶であるが、インドでは一般社会人が白衣を多くもちいた。しかし、白衣をもって一般人を意味するのは、インドの出家はすべて壊色した袈裟衣をもちいたから、これに対して壊色しない白衣などを着るのは一般社会人であったため、出家でない人を白衣といったのであろう。

金銭については仏教比丘はまったくこれを手にせず、喜捨があっても受取らない。このことは出家一般にそうであったとも考えられる。しかし、仏陀時代をすぎて金融経済時代になると、サンガにも金銭は不可欠の時代がくるが、その場合でもサンガに淨人という出家でない使用人がいて、これがとりあつかい、比丘は金銭にタッチしない原則を守ったのである。

このように、サンガにいる出家者である比丘と比丘尼は、完成した出家者ともいうべきで、そのほかに見習の出家者としての沙弥、沙弥尼、式叉摩那の三種があり、合せて五衆の出家者となる。この出家者に対して、在俗の信者の男性を優婆塞（ウバソク）といい、女性を優婆夷（ウバイ）という。これと出家の五衆を合せて、広義の意味の仏教サンガの七衆とするのである。

信者の財務 仏教の在家信者、すなわちウバソクとウバイとは、三宝に帰依して五戒を受けた人をいう。三宝とは、仏陀と仏陀の教とその教を信奉するサンガとである。仏陀とその教に帰依し信仰をささげることが当然であるが、さらにサンガに帰依するとは、尊敬の意味はもちろんあるが、具体的には、サンガから仏陀の教の伝道をうけて、これに対して、信者の方から僧伽へ、比丘の夜食そのほかの僧伽維持の資材を献ずることの義務を負うことをいうのである。

信者の五戒 仏教信者が、信者として各自守らねばならない道徳上の禁戒を五戒という。これは、邪淫、妄語、殺生、盗取、飲酒の五をいうのである。

このなか、邪淫は正常な夫婦生活のほかの男女関係を犯すことでよくいましめている。妄語はいつわること。殺生はチヤイナ教などは絶体に生きものを殺さないというが、仏教ではことさらに生命を奪わないことである。水中に虫のいるときは水を布帛などで漉して使用するというように一応の努力をして、不殺生を心がけるようすすめるのである。

盗みは絶体に禁じて、あたえられないものとはってはいけないとおしえる。飲酒のなかには酒を売ることといけなさとされているが、これも精神を錯乱して不覚にするのを禁ずるがためである。比丘の場合でも体質などで必要とする場合に

(童)(心)(仏)(心)

ことしも楽しい年で
ありますように

隣の家には、本物のピアノがあります。一人娘のF子ちゃんが、先生に來てもらって毎日練習をしています。家族の人は、それぞれの生活が忙しいのか、これは全然無関心。

「高い月謝を払っているのに、まだ、それつばかりしかひけないの。」

たまにいうのが、おかあさんのこの言葉です。

さて、裏の家のA子ちゃんは、F子ちゃんのピアノを見て、ねだつて、ねだつて、とうとうおもちやのピアノを買ってもらいました。

家族の人は、隣の家と違って和氣あいあい。A子ちゃんの雨だれ式演奏にあわせて、素朴な合唱。おとうさんの低い声、おかあさんの高い声、A子ちゃんの弟の可愛い声が、冬のつめたい夜風を通して聞こえてきます。

本物のピアノと、おもちやのピアノ。家族ぐるみの楽しい楽器として、どちらが楽器を活かしているでしょうか。

今年も、家族調和の、楽しい、なごやかな、笑い声に満ちた家庭でありたいものです。

(桐)

は、薬として服用する場合があるくらいで、一般信者にももちろんそのようなことは認められるはずである。

このように信者になるのに、三宝に帰依するとともに、五戒を受持することを誓い、日常生活においてつとめることが必要とされるのである。(大正大学仏教学部長・大仏殿住職)

年 新 賀 謹



同 一 部 集 編 土 淨

「淨土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年

金六〇〇円

(送料不要)

淨 土

一月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年十二月廿五日 印刷

昭和三十五年一月一日 発行

定価 五十円

編集人 村 瀬 秀 雄

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人顕仰会

振替東京八二一八七番

The testimonial
from the governor of
Kyoto
awarded to
U. NAKAMURA.
the director



The letter of
gratitude from
the Mayor of
kyoto sent to
NAKAMURA FUNGUS
CHEM. LAB.

中村医学

全治に実力作用する特
許フザリユームの解毒
から病原の淘汰作用！
発生シワルツマン因子
の滲透から再生作用！

匠学ニユース

中村医学の学理を
世界に発表さる

大阪医大の名誉
教授谷村博士は
兼て中村菌液の
実験を実施され
その卓効力を刷
新論文に英訳さ
れて全世界の医
学界に報告の光
栄に浴しました

中村医学必携
実験写真入ア
ト縮本贈呈
◎御申込下さい！

中村医学にて難病の治る真理

中村医学の基礎



恐るべき耐性菌を崩壊淘汰する



滲透するバクテリア層を完全淘汰する



例 告 報 話 実 験 実

- (一) 高血圧で脳溢血の危険状態を好転恢復されている報告。
- (二) 心臓病特に危険な狭心症の危篤を好転恢復している報告。
- (三) 癌腫の進行を阻止し癌細胞を溶解淘汰して食道癌、胃癌、舌癌を恢復している報告。
- (四) 肺結核の治療中に耐性悪化した薬毒の副作用を好転して恢復されている報告。
- (五) 肝臓を腫らし胆嚢を痛めた危篤の入院患者が好転恢復した報告
- (六) 胃潰瘍で食事出来ず手術を要する危篤患者が好転恢復した報告。
- (七) 腎臓、糖尿病で入院すれど全治せぬ状態から好転全快の報告。
- (八) 関節リュウマチ並に神経痛で入院しても全治不能の難症が好転して楽に歩行できる報告。
- (九) 喘息で注射するほど発作してくる病原と副作用の滲害を解毒好転して100%全治した報告。

中村菌化学研究所

京都市東山区南五条
電話 祇園(6)2364・0522番

Nakamura Fungus Chemical Lab.
Sayamachi Gojo, Higashiyama-ku,
Kyoto, Japan

御たを
をつを
をなを
告に名
本に誌
覧記入

新刊予告 (二月下旬刊行予定)

大正大学教授 佐藤良智 著

真理のはなたば

新書版
予価 三十円

若き人びとにおくる佛教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

法然上人鑽仰会編

浄土日常勤行式解説

新書版
予価 三十円

檀信徒の方々への信仰の手引書として御利用下さい

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響 理学博士 青木一郎先生
日展参事 賞

梵鐘界の権威 芸術院賞 香取正彦先生
受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田